

日本ユニセフ協会大使
アグネス・チャン

スーダンレポート



スーダン人民解放軍 (SPLA) が支配するバール・エル・カザール州のアチョンチョンには多くの避難民が流入しています。ここで人びとに歓迎されるアグネスさん。
©日本ユニセフ協会

激しい内戦が続くスーダン南部の視察に訪れていた日本ユニセフ協会大使 アグネス・チャンさんが8月21日に帰国し、緊急会見を行いました。

アグネスさんは8月11日にスーダン南部に対する国連の支援拠点、ロキチョキオに到着しました。その後13日から17日までワオ郡の村、マベルに滞在し、ユニセフをはじめとした国連の活動を視察しました。その間、わずか2日前に近郊で戦闘があったという村、アチョンチョンを訪れ緊張の中に生きる避難民と語り合い、人びとの生活を視察しました。



診療所で診察を待つ難民の母子。母親はやせて歩けないほど衰弱しており、生後11日の赤ちゃんの体重は1キロしかありませんでした。(マベルにて)
©日本ユニセフ協会/Shindo

一帯に広がるサバンナ。気温は35度近く、湿気がいつもたちこめて、重苦しい空気がまとわりつきます。時折雨が降ると粘土質の土壌はぬかるみ、空港の土の滑走路も使えなくなるありさまです。蚊が多く、マラリアが蔓延して多くの子どもたちの命を奪っています。このような地に難民キャンプはありました。

「ぼくは8歳の時から戦場にいたんだ。自分を守るためには兵士になるしかなかったから。ぼくの宝物はぼくの命さ。」<子ども兵士 サンティーノ君 (12歳)>
「夫も子どもも殺されてしまいました。わたしにはもう笑う元気もないのです。」<難民の子どもを預かっているおばあさん>

子ども兵士や子どもを亡くした母親の生々しい体験談はスーダンの現在の厳しい情勢を如実に物語っています。6歳のときにおとうさんを目の前で殺されたサンティーノ君はさらにこう話します。

「ここでの生活は厳しいんだ。それがぼくらにとっては当たり前なのさ。ぼくはずっと兵士だった。親を殺されたら、かたきをとりたいと思うのは当たり前だろ。そういうことをわかってほしいよ。」

サンティーノ君は子どもの兵士だったが、けがのため



ケニア北部のカクマ・キャンプに収容されたスーダン南部の元子ども兵士たち。彼らは1986年から92年頃までスーダンのSPLAを支援していたエチオピア政権下のキャンプで教育と軍事訓練を受けていたが、エチオピアの政権が変わったため難民となりました。
©日本ユニセフ協会/Shindo



アチョンチョンの学校で、子どもたちが自分の描いた絵をアグネスさんにプレゼント。自分の夢などが描かれていました。
©日本ユニセフ協会/Shindo

に除隊となり、現在は学校へ戻っています。サンティーノ君をはじめ多くの子どもたちにとって自分を守るためには兵士になる以外に選択肢はないのです。40年以上もさまざまなかたちで内戦が続くスーダンでは、子どもたちは平和の姿を知りません。その上、親やきょうだいを殺され、憎しみだけがふくらんでいきます。復讐のために兵士になろうとする子どもがいても不思議ではありません。

子どもたちがもっとたくさんの夢の選択肢をもてるようになってほしい。そのためには何よりも戦争が終わらなくてはなりません。戦争が終わらない限り十分な援助もできません。平和が何よりも大切なのだ、と実感しました。



マベルにある小学校。避難民の子どもたちもここへ通っています。
©日本ユニセフ協会/Shindo



ロキチョキオの病院では、地雷の被害を受けた子どものリハビリが行われています。スーダンでは国土総面積の約3分の1にあたる80万平方キロメートルに50万から200万の地雷が埋設されていると推定されています。ユニセフとUNHCRが中心となり、地雷の被害にあわないための教育や地雷廃止に向けた啓発活動などを行っています。
©日本ユニセフ協会/Shindo

スーダンの情勢

スーダンでは、政府軍と非ムスリム勢力「スーダン人民解放軍 (SPLA)」とが1983年以来内戦状態にあります。この結果2800万人の人口のうち400万人が国内避難民となっており、過去15年間に190万人が内戦によって死亡しています。

1998年には過去10年間で最大の飢饉が発生し、南部のバール・エル・カザール州だけでも80万人以上が餓死の危険にさらされました。難民および避難民となった人びとは、国内の戦闘、民族間の抗争、自然災害、周辺各国の情勢などに左右され移動を余儀なくされます。たとえば9～10月にかけてコンゴ民主共和国東部の政情不安のために何十万人ものスーダン難民が西エクアトリア州に戻りました。また、8月後半から9月にかけて発生したナイル川氾濫と異常な豪雨は多くの被災者の発生を招き、人道機関による緊急救援はバンク寸前まで追い込まれたのです。

現在、ユニセフおよびWFP、WHO、FAOなどの国連機関と39のNGOによって組織されるOLS (Operation Lifeline Sudan) が最大の包括的な緊急救援を行っており、事態はやや改善されています。OLSは約100万人の食料ニーズに応えたほか、全国予防接種デーを設けて80万人以上の子どもたちにポリオワクチンを投与したり、避難民キャンプで下痢の大発生を食い止めていたりしています。

また、160万人の学童年齢の子どものうち在学している子どもの割合は30%です。慢性的な避難生活は特に女の子の教育機会を奪っています。OLSはこの状態を改善するため、50万人の子どもへの教材支給、教員の研修、試験的な学校給食事業の導入、など10以上の事業を計画中です。



アチョンチョンの難民キャンプ。わらわでできたテントが広がっています。このキャンプでは350家族、約2000人が暮らしています。日本ユニセフ協会/Shindo

アグネスさんの訪問のようすは、NHK BS1で放送される予定です。
放送予定日：10月8日 (金)
20:00～21:00
(放映日・時間は予告なく変更されることがあります)